

使徒言行録10章34節～48節
『神は人を分け隔てなさない』

使徒言行録を読み進めて今日で10章を終えようとしています。あらためて1章から読み直してみると、ここに至るまでに実に多くの回心の出来事が使徒言行録には記録されていることに驚くのです。

回心というのは、自分はキリストに救われている、ということを受け取って、洗礼へと導かれていくことです。

ペトロは2章で「悔い改めなさい。めいめいイエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」回心へと導かれ、洗礼を受けたら、聖霊が注がれますよ、といったのです。しかし、実際にそれぞれの回心の様子を読んでいくと、必ずしもペトロが語ったことが、唯一のパターンではない、ということがわかるのです。聖霊を先に受けて、洗礼へと導かれたものもあれば、洗礼を受けてから聖霊を受けた者もいます。パウロのように洗礼を受けたけれども聖霊は前だったのか後だったのか、はっきりとわからないように書いて場合もあります。それはとても興味深いことで、回心のドラマは一樣ではなく、その時々、さまざまな形があるということをお話しているのでしょう。

ペトロは間違ったことを言ったのではなく、彼はそう受けとめていた、ということでしょう。一人の人がキリストと出会い、回心へと導かれる、ということの中心には、神の自由な働き、聖霊の働きがあるのだ、と使徒言行録は語っていると思います。しかし、同時に、人間の側のドラマもある。例えばエチオピアの高官の場合で言えば、彼はエルサレムで何らかの仕方で、聖書というものと出会い、それを帰りの馬車の中で読んでいた。しかも彼は旧約聖書の中のイザヤ書を読んでいて、そこに聖霊によって遣わされたフィリポがやってくる。フィリポは「読んでいることがわかりますか。」と尋ねる。それに対してエチオピアの高官は「手引きしてくれる人がなければどうしてわかりましょう。」と応えて、「どうぞ教えてください。」実に素直に、ある意味勇気をもって、教を乞うのです。そしてフィリポがそれに応えて聖書を解き明かしていく。ここには、聖霊の働きと人間の意思が交錯するドラマが短いけれど端的に語られています。回心へと至る道は、神の働き、聖霊の働きがあり、人間の思いがあり、それが重なり一つの道筋が生まれる。回心のドラマは一樣ではない。それはわたしたち自身の場合を考えてもよくわかることです。

回心した人たちも実に様々です。最初に主イエスの弟子たちのことが1章に記されています。逃げ出した弟子たちが復活した主イエスに出会って、新たに洗礼を受け、主の弟子となって歩みだしていく、それは弟子たちの再びの回心です。2章にあるエルサレムに集まっていた人たちというのは、イエスのことを嘲笑っていた人たちだった。その人たちが、キリストを信じて、洗礼を受け、聖霊を身に受けていくのです。4章、5章、6章には詳細は語られていませんが、いろいろな人たち、男や女や、中にはユダヤ教の祭司も、回心へと導かれたことが記されています。

8章ではサマリヤの人たちが回心しました。サマリヤというのは、ユダヤと確執を抱え、隔ての壁がある地域でした。そこで回心者が与えられた。続いて先ほど話したエチオピアという外国の高官が回心へと導かれた。それはどういうことなのか、たとえば、福音に国境はない、ということです。国境なきキリストの福音。そして9章のパウロの回心。それは、キリスト者を迫害していた敵の回心ということです。そして10章でのコルネリウスの回心。ユダヤを政治的に支配していたローマ軍の隊長の回心です。それは政治的な関係も貫通していく福音ということでもありましょう。回心の記録をこうして読むことは、わたしたちが福音の力を知ることであります。イエス・キリストの十字架と復活の福音は、どこの国の人であろうが、どこの民族であろうが、敵であろうが見方であろうが、政治的な立場がどうであろうが、それらにとらわれずに、一人一人を救いに与らせる。

と同時に、回心の記録を読むと、人を回心へと向かわせるのは、福音そのものの力、神の働き、聖霊の力、なのだということがわかるのですが、そこで、キリストの証人が用いられる、ということがわかるのです。

キリスト者となった、キリストの証人となったものによって福音は具体的に宣べ伝えられる。

わたしたち自身のことも振り返ってみる必要がここにはあります。わたしたちが回心へと導かれたのは、実にいろいろな人との出会いがあったのではないかと思います。教会学校、日曜学校の先生から始めて聖書のお話を聞いた、という人も少なくないと思いますし、ミッションスクールに通っていた方ならば、毎朝の礼拝で先生の口を通して聴いた福音、そして教会の牧師から、毎週の礼拝で聞いた説教、家族に信仰者がいる方であれば、父や母や、祖父母から聞いた言葉、教会で出会った人たち、実に多くの人たちから福音の証言を聞いてきたのだと思います。そして、それがわたしたちを聖書の言葉へと向かわせ、聖霊が働き、神の言葉が、わたしたちの体の中に入ってきたのだと思います。回

心へと導かれていく、とはそういうことです。

福音の力は言うまでもなく、われわれ人間の力ではない。我々を超えた神の力です。イエス・キリストの力です。しかし、それは、福音を信じた者たち一人一人、によって宣べ伝えられ、証しされる。それ以外ではない。新生教会をこの地に立てたのは、神の業ですが、それは人間を用いて行われた、人間の業でもあるのです。

ペトロは、コルネリウスの家で福音を語ります。これはペトロが外国人に対して初めてした福音の語り、説教です。そこでペトロが最初に言ったのは、「神は人を分け隔てなさないことがよくわかった。どんな国の、どんな民族の人でも神を畏れる人は神に受け入れられる。」ということでした。それはまさに先ほどから話している、福音には国境がない、民族の違いも、敵味方も、政治的な立場の違いもない、ということです。ペトロは外国人に福音を語る際にまず、このことを語った。ほとんどユダヤ人以外との接触のなかったペトロ。ユダヤの慣習を大事に生きてきたペトロ。だが、彼は福音の力というものをわが身で、自分の周囲であらためて感じてきたのです。この福音はユダヤ人だけのものではない、相手がだれであれ、人間を本当に支え、活かし、救うものなのだ、ということがペトロにわかってきたということです。だからペトロは福音を差し出す。そしてその福音はサマリヤ人であろうが、エチオピア人であろうが、ギリシヤ人であろうが受け取られていく。それはペトロにとっても驚きだったと思います。驚きであり、不思議だった、と思います。しかし、それが受け取られていくのです。福音の力です。

このペトロの説教は聞いてわかりやすいものではなかったと思います。読んでも難しい。話があっちに行き、こっちに行きという感じです。それだけ元の感じが伝わってくるともいえる。外国人を前にして、しかもイエス・キリストのことを何も知らない人たちを相手に何をどう語ったらいいのか、説教を整える時間もなかったでしょう。ペトロはキリストを証しすべく、懸命に語ったのです。洗礼者ヨハネのことから語り始め、神が遣わしてくださった方こそイエス・キリストなのだ、ということ語り、キリストが人々を助け、悪霊に苦しめられている人たちを癒された、それはすべて、キリストが神と共なる人、神の独り子だったからだ、ということペトロは懸命に語ったのです。この懸命にキリストを証しするペトロの姿をわたしたちは心に刻み込んでおく必要があります。ペトロという人は、別にペトロに限らない、わたしたち皆がそうですが、欠けの多い、あやまちも、恥ずかしいことも、たくさんあった人だと思

ますが、懸命にキリストを証しする人だった、ということをおぼえてはならないと思います。

ペトロはこの説教の始めで、この方こそ、すべての人の主です、と宣言しています。すべてのもの救い主だ、というのです。そこには二重の意味が込められていたと思います。

一つは、福音に国境がない、ということ。男も女もない。身分の高い低いもない。お金のあるなしも関係ない。つまり人間の条件によらない。それがすべてのものの救い主だ、という意味です。

もう一つは、生きている者にとっても、死んだ者にとっても、イエス・キリストは救い主だ、ということです。今この地上で生きている者にとっても、かつてこの地上で生き、今は神のもとにある者たちにとっても、キリストは救い主だ、という意味です。

キリストはわたしたちすべてのものの罪を負い、罪の赦しを与えるとともに、わたしたち生きているもの、死んだ者にとっても、すべてのものの、主だ、まことの主だ、とペトロは語る。

わたしはこのキリストの福音の証人です。そして主であるイエスは、この福音を力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました、と語るのです。

ペトロの説教が続く中、コルネリウスをはじめ、友人や親類たち一同の上に聖霊が降った、と聖書は語ります。そして聖霊の賜物である異言を語り始め、神を賛美し始めた、とあります。ここをうまく説明することはわたしにはできません。聖霊が今降った、というようにはわたしにはわからないからです。しかし、一人の人がキリストを受け入れ、神を賛美し始めるときに、まちがいなく聖霊は働いているのです。ペトロはそこに大いなる神の働きを知らされ、洗礼へとコルネリウスをはじめ、一同に勧め、コルネリウスたちは洗礼を受けたのです。洗礼は生涯に一度の出来事です。しかし、回心は生涯に一度のことではありません。回心は信仰のゴールではなく、始まりであり、キリスト者の歩みは、回心の連続です。福音と新たに出会い、その福音の力に生かされ、福音の証人として歩むペトロの姿を胸に刻みたいと思います。